

特集：2006年度日本数学会出版賞受賞者のことば

安野光雅氏

ずいぶんむかし、まだ遠山啓先生がご健在だったころ、わたしは、先生の御著書の装丁をしたことから、その讐咳に接したのです。

「三角形の内角の和が180度だなんて、なんとまあ美しいことを、いったい誰が見つけたのか、見つけなくても自然が、黙って隠していたんでしょかね」とか、今思うと汗顔の質問をして先生を苦笑させたものでした。

あ、そういえばそのころ、「数理科学」という本の村松武司という人が、突然「通商条約を結びたいのだが・・・」と電話をくれたことがありました。それで、あの雑誌の表紙を長く描かせてもらったのです。

あの雑誌のおかげで数学者という近寄りがない人たちがいることを知ったのです。

その後、「くらべてかんがえる」とか「ふしぎなきかい」（福音館書店）などいろいろな絵本をかいているうちに、福音館の藤枝滯子という編集部の人が「はじめてであうすうがくのえほん」というシリーズにしたいといいはじめたので、「え？大丈夫かな、遠山先生に聞いてみよう」と、そのころはまだ横浜？におられたのです。そのお宅をたずねたことがありました。「数学というのは順序だててものを考えることだ」といわれて、納得し、わたしはずいぶん思い違いをしていたことがわかりました。で、晴れがましくも「すうがくのえほん」というタイトルをつけたのです。

後に台湾でそれが翻訳出版されました。「數學世界的圖画書」という書名になりました。数学の世界的な圖画書と読むのかと思っていましたら「数学世界の絵本」というほどの意味にすぎないことが、やっとわかりました。

遠山啓先生は故人となられて久しく、快男児松村武司も故人となりました。藤枝滯子は京都の大学の先生をやっておられました。森毅とは一月ばかり前、京都であいました。この賞のことはいいそびれました。野崎昭弘は最近著書を装丁しました。むかし遠山先生から紹介された清水達雄さんとは、今も音信があります。このたび「日本数学会」から賞をいただいたことを報告すべき恩人はだんだん少なくなりました。まだいることはいますが、あとは賞をタネに、酒にしようと思う人たちばかりです。

過分の賞をありがとうございました。

安野光雅